

# 聖書之真理

第四十八號

十月號

主筆 江原萬里

現代の宗教論の特色

主筆

基督教の再轉向

エキスホントリ・タイムス

エレミヤ記の研究

江原萬里

エレミヤの生涯(下)

エレミヤの聖召(上)

輓近考古學と舊約聖書

小栗襄三

アブラハムの時代

十字架の福音

石川仲伊

柏木通信

齋藤宗次郎

祖父の書翰

江原萬里

湯川寛吉翁の思出

江原萬里

昭和六年十一月一日發行

## 湯川寛吉翁の思出

○去月二十三日大阪の住友合資社前總理事湯川寛吉翁の逝去の報に接して其死を惜しんだ。翁は私の恩人であり、私の最も思出多き人の一人である。拙著聖書の現代經濟觀の讀者は、どうして私が始めて翁を知るやうになつたかについて書いたものを記憶せられるであらう。私は學校を卒業する頃何になつても官吏殊に實業家にはなるまいと決心した。當時私の眼には實業家と云へて皆我利我利者であつて自分の利益のためにはどんな悪事でも平氣とする者であるかのやうに映じて居た。それ故私は卒業後暫く途方に迷ひ毎日圖書館通ひをして其の日を胡麻化した。其の時突然矢作博士から二箇所に宛てた同文の書狀を受取つた。其の上それでもまだ不安と思つて博士は親切にもわざわざ私の寓居を訪れて来て下さつて、目下住友の重役の湯川氏が上京中であるから一度面會しては如何と勧められた。○私は博士の學生を愛せられる情の厚いのに深く感じた。それ故別に住友に就職を望んだわけではないが博士の勧めに服つて翁を訪れた。其の時翁は何に興味を有つて居るかと思はれたので私は目下社會問題に關する書物を讀んで居て我國の資本の集積の状態を調べて見たいと思つて居ると答へた。そう云ふ問題に興味を感じるやうになつた動機は精神的であつた。私の眼をかやうに精神的方面に始めて開いた人は第一高等學校長の新渡戸先生であつたと語つた。そして私が一高の一年生の時全寮茶話會の夕校長排斥の大騒動が起り學生一同極度に興奮したが、その時校長の態度は實に美事であつて私はそれに感動した事を翁に話した。そして私はそれを傾聴して居

る翁の兩眼に涙が一杯たまつて居るのを見た。翁は自分が嘗て東京郵便電信學校の校長をして居た時の經驗を語られ私の云つた言に深く感じられた様子であつた。

○社會について全く無經驗であつた私は實に翁との面會で始めて我國の實業界にもこんな人があるのかと吃驚した。若し私が此の時翁に面會して居なかつたらば、多分我國一般の實業家に對する學生時代の偏見は其の後益々硬化するばかりであつたであらうと思はれる。此の面會あつて十數日の後私は當時住友總本店の總理事故鈴木馬左也翁から面會申込の電報を受取り大阪に在る總本店に彼を訪れ數時間に亘り中田湯川兩理事列席のところで面會した。(今は三人共此の世にない)其の事は聖書の經濟觀に稍詳しく書いた。

○面會が終つた時は午後の五時を過ぎオフ井スは閉され秘書の久島君が只一人残つて居た。私は同君と用事をすませて辭してそこを去らうとした時湯川翁が私の居た應接室に來られ、これからどうする積りかと聞かれた。私は大阪のついでに郷里津山に歸つて父の墓に參る預定と答へた。親孝行であり、私への手紙にはいつも北堂によるしく書添へられる翁はそれを聞いて喜ばれ、今日は最早夕方に近く且つ雨さへ強く降つて來たので一泊してゆかないかと勧められ、私は其の好意に甘えることになつて共に深江に出掛けた。

○深江の宅に一泊して私は翁に一層の親しみを感じた。翌朝は二人で海岸を散歩し、電車の停留場まで行つて東西に別れた。此の時翁は一言も私に住友に入つてはどうかと勧められず、私も亦入り度いと願はなかつた。只翁の眞心は深く感銘した。翁がなかつたらば私は住友に入り得なかつたであらう。(以下表紙第三面に連續)

# 聖書之眞理

## 第四十八號

昭和六年十月一日發行

### 現代の宗教論の特質 主 筆

現今世に流行する宗教論の著しい特質は論者に回心の經驗なく、従つて科學と哲學とによつて人間の救済、社會の完成を説くことに在る。

抑も回心の經驗とは我等の見る此の世界の奥底に在る永遠實在の世界の示現を受け、己が存在の根源を發見した事を云ふ。現在自分が自分で知るところの自己、其の性格と能力以上の自己こそその使命とを發見した事である。それはキリストのうち在る自己である。神が自己の凡てであり給ふ事である。聖書に示された自己を其の儘承認することである。

讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて靈のもろもろの祝福をもて天の處にて我らを祝し、御前にて瑕きずなからしめん爲に、世の創はじめの前より我等をキリストの中に選こび、御意ごこころのまゝにイエス・キリストに由りて愛をもて己が子となさんことを定め給へり。……我らは凡ての事を御意ごこころの思慮おもひはかりのまゝに行ひたまふ者の御旨によりて預じめ定められたり（エペソ書一・三以下）。

此の啓示の經驗を基礎とせずば、その宗教論は人間本位たらざるを得ない。これが現代流行の宗教論の特色である。彼らは聖書を其の儘神の御言として受容れ得ない。之を現代の科學と哲學とを以て批判し、之に反しないものだけを採用し他を排除する。彼等は聖書の永遠性を否定し、宗教的眞理を以て時代の産物とし、其の本質は歴史と共に流轉する者と見る。夫故に彼等は現代の要求に



最も適應する宗教を現代の科學と哲學との基礎の上に新に建設しやうと努力する者である。

既に現代の宗教論は人間本位であつて神本位でない。神あつての人でなく、人あつての神である。神が降つて人を救ひ給ふのでなく、人が昇つて神に達しやうとするのである。此の聖なる努力に二途あり、彼等は相互に相反對しつゝ、其の孰れかの途を辿りつゝある。

其の第一は從來より唱へ來つた個人主義的理想主義がそれである。個人の純眞、生活態度の嚴正、聖潔をもつて神に達しやうとの努力精進に餘力を惜しまないものである。之れ我等の常に觀るところであり、基督教とはこれであると多くの人々に思惟されるところのものである。

第二は此の從來の『基督教の本質』に反對して近來盛に唱道されつゝある所謂社會的宗教の主張であつて、基督教の本質は個人的救より社會的救

に轉向すべき事を唱へ、現代の要求に答ふるものの宗教は社會的理想の達成を本質とするものでなければならぬと論ずる者である。

此の二者は互に相反して居る。然かも二者に共通なることは等しく人間から出發して神に達しやうとの眞劍なる且つ悲壯なる努力である。企圖である。彼等は天が地に降りて救を成就し給ふ事を信せず、自らバベルの塔を築いて天に達しやうとするのである。此の虚しき努力は失敗に終り、彼等は孰れも失望に陥るは必然である。救は只『昨日も今日も永遠までも變り給ふことなき我等の救主イエス・キリスト』が之をなし給ふ。

なんぢ心すべし。恐らくはキリストに従はずして人の言傳と世の小學とに従ひ、人を惑はす虚しき哲學をもて汝らを奪ひ去る者あらん。それ神の満足れる徳はことごとく形體かたちをなしてキリストに宿れり。汝らは彼に在りて満足れるなり。

## 基督教の再轉向

我國の基督教界に於ては最近主として聖公會の某氏等によつて盛に現代基督教の本質は個人教から社會教に轉向すべき事を論議されて居る時、最近刊の英國聖公會系の雜誌エキスポジトリ・タイムスは英國の基督教界の一般の傾向は既に社會教から個人教に再轉復歸しつつある事を報じて居る。甚だ興味深ければ左に之を譯出する。此の傾向はやがて經濟學上でも問題となるであらうと思ふ。又本誌上に連載するエレミヤ記の研究に大なる參考となる。

個人の救が宗教の全部であると説かされたのはさ程遠い昔ではない。その頃何よりも重要な問題は『われ救はれんために何をなすべきか』使徒行傳一六・三〇)であつた。然るに其の時以來重點は動いた、個人の救の強調は社會の救の強調に移り代つた。今では昔と同じやうな焦慮と絶望せんばかりの苦悶をもつて尋ねられる問題は『救はれん

ために社會は何を爲すべきか』である。

近刊著書の表題その物が此の重點の轉向を指示して居る。曰くビーボデー著イエスキリストと社會問題、ルキ・ウォリス著聖書の社會學的研究、アムプローズ・シエバード著福音と社會問題、C R ブラウン著現代教壇の社會的教信、C R スミス著社會に關する聖書の教義、ウォルター・ラウシェンブッシュ著基督教と社會的危機、S E キーパー編聖書の社會的教訓論集、其の他挙げれば數限りない。

然るに重點は再轉して個人的の方に歸向しつつある徴候は少くない。かやうに云ふことが若し眞でないならば——何となれば基督教を信する者に限らず何人と雖も眞面目な人々は二度と社會の救の重點を無視し得る者はないから——少なくとも

も、かく言ひて間違はない、即ち双方の重點の重要を維持しやうとの試がなされつゝありと。社會の品質は全然之を構成するところの男女の品質に依屬すると云ふ事が今や之に最も關心事を有する人々に切實に感じられ、明白に認められ、近く明瞭に發表せられるであらうと希望されて居るのである。社會は決して之を構成するその最も高貴なる人々よりも高貴であり得ない。若し我等が更に高貴なる社會を求めらば、我等が悉く一層高貴にならんと企求せねばならない。社會の救を細かく分けて見れば結局それは個人の救に依屬して居ることがわかる。それ故とどのつまりこう云ふ事に歸着した。曰く、根本的問題は『救はれんためにわれは何をなすべきか』である。若しわれが救はれたならば少なくともそれは社會の救の一小貢献である。

救の社會性を論ずる人々はイスラエルの預言者を援用し、彼等を社會改革の開拓者と見るのを常とする。されど預言者を社會改革者として論じやうとする者は己れ自ら預言者の使命について甚だ淺薄なる理解を有することを暴露するものである。確かに彼等の使命には、若しそれが人心に感銘せられたならばその結果の一として、現今我等が目して社會改革と云ふやうなものを生せしめたであらう。されど彼等を社會改革者として表はすことはイエスをそう云ふと同様に正確でないであらう。彼等は夫よりももつと深いものを目差した。

彼等には社會問題の眞の解決は宗教的解決であつた。彼等が改革しやうとしたものは人であつて社會状態ではなかつた。改革された人にこそ社會状態の改革は委かされ得るのである。そして人は神のうちにて始めて改造 Reform される。



此の意味に於て彼等は改革者であると云うて差支はない。パウロは云つた『人若しキリストに在らば新に造られたる者なり』(コリント後書五・一七)と。預言者も亦云ふであらう『人若し神に在らば新に造られたる者なり』と。否、彼はそうは云ひ得ないであらう。何となれば『神に在る』とは舊約的の言でない。彼は少なくとも、かく言ふであらう『人若し神を知らば新に造られたる者なり』と。

預言者たちは神を知ると云ふ事に甚だ重きを置いた。その事は偶々以て普通の改革者ごとの位違ふかを示すものである。ホセヤは云ふ『わが民は知識なきによりて亡ぼさる』(四・六)と。彼等を滅亡に引きづりゆく無知とは神を知らない事であつた。彼は嘆じて云つた『此の國に忠實なく、愛情なく、神を知る事なければなり』(四・一)と。此の事は神を知る知識の缺乏を以て當時の社會の三大

缺陷の一と云ふのではない。此の缺乏があるため他の二つの缺陷が生ずると云ふ事を意味した。もつと現代的用語をもつてせば、社會的道德の沈衰は個人的なる宗教が沈衰して居るからであると云ふ事である。

此の思想はエレミヤにもある。ヨシヤ王の思出として彼を貧しき者と乏しき者との訟を理したごの頌徳の辭を呈して後、彼は進んで云つた『この事はわれを知る事ならずやとエホバ云ひ給ふ』(二二・一六)と。當時神を知るとは自分の人格が神の人格のうちに没入する事ではなかつた(意譯)。へブル的天才の特色である驚嘆する程なる倫理的性向よりして神を知る知識は社會的義務の履行と密接に結び付いたのである。

預言者の任務の如何なるものであるかにつき我

等は幸にも預言者自身之について語つたものを有つ。ミカは神によつて賦與された務は『ヤコブにその不法を示し、イスラエルにその罪を示す』(三・八)ことであると云つた。こゝには預言について何事も述べてないやうに。改革についても亦何事も述べてない。預言者のする仕事は現代の言を以て言へば、世の良心を喚起する事であつた。彼は之をなすために社會的又政治的計畫を宣べるのではなく、神の需め給ふところに従つて行爲を正すことに由つた。

社會問題解決に對する彼等の最大貢獻は個人の性格の甚だ重要なことを憚むことなく主張したことに在つた。環境は疑もなく性格に影響する。これは勘定に入る。限りなく勘定に入る。然し乍らそれは根本的のものではない。預言者は問題を其の根元まで辿つて遂に人間の心に達した。エレ

ミヤが云ふやうに、心は萬物に優りて偽る者であり、絶望的に患つて居るのである(二七・九)。恒久的の價值ある變革がなされなければならぬものは此の心である(中略)。

エレミヤに由れば、この人の心も腐敗して居る。然し黄金時代が來たならば神の律法は各人の心の上に銘りつけられるであらう。『かくて小より大に至るまで悉く我を知らん』(三一・三四)である。各人悉く神の眼に直接に且つ不變の價值を有するに至るのである。成程その事はどんな特殊な問題でも直ぐに解決が出来ること云ふことは保證出来ない。然しそれは凡ての問題に對して正しき態度を提供する。そして人間を道具とし搾取し得る無力の存在と見るところの一切の解決法を無價值且つ不可能として之を排斥する。



これは又イエスの態度ではなかつたか。彼の主眼は外的状態を變革するのではなく人を神のため又己御自身のために得ることに在つた。かゝる人々をもつて構成する社會と雖も尙問題はあるであらう。然し乍ら好意ある解決法は常に探求せられ而して見出されるであらう。何となれば社會は調和ある社會であつて、名ばかりでなく、その行爲に於て、又事實に於て兄弟であるところの人々の社會であるから。その社會の凡ての人々のうちにイエスが與へんとして來たり給ふた生命がある。彼は云ひ給ふた。『われ來るは彼らに生命を得しめ、かつ豊かに得しめん爲なり』(ヨハネ傳一〇・一〇)と。彼らは世の如何なる物に優りてその生命を求めるであらう。然かも何を措きてもこれを求めて彼らは『凡て他の物は彼らに加へらるべし』(マタイ傳六・三四)と云ふ事を知るであらう。

## エレミヤ記の研究

エレミヤの生涯 (下)

江 原 萬 里

### 新約の先驅者

エレミヤは亡國に際して如何に神殿あり、神を拜する諸制度が完備するも之を以て神と民との關係が義しく維持せられない事を深く感じた。神と民との契約關係、即ち神が神であり、民が民であるため民が嚴守を誓つたモーセの律法があつても弱き人間は到底之を嚴守し得ない事を悟つた。若し神と民との關係を義しく維持するためには石牌に銘りつけられた律法では不可能であつて、神を知る律法は必らず民の心に銘りつけられなければならぬ事を痛切に感じた。即ち神を知る新らしい心が要る。神若し契約に忠實であり給ひ、一度

選んだ神の民を棄て去り給ふことなきためには、その民の罪を赦すと同時に神を知る此の新らしい心を與へ給はねば、民は再び罪に陥り再び滅ぶであらう。エレミヤは亡國の悲痛を経験し神の心を深く探ね入り遂に此の大なる啓示を得た。神はモーセの契約が肉に於て弱くして成し能はぬ所を新なる契約をもつて成就し給ふとの啓示である。

エホバの言——視よ、我がイスラエルの家(とユダの家)と新らしき契約を結ぶ日は來たりつつあり。この契約はわが彼らの先祖の手をこりてエジプトの地よりこれを導き出せし日に結びし所の如きにあらず、彼らはその我が契約を破れりとエホバいひ給ふ。然れどかの日の後にわがイスラエルの子らと結ばんとしころの契約は此なり、即ち、われ我が律法を彼等の衷におき、その心の上に録さん。我は彼らの神となり、彼らは我民となるべしとエホバいひ給ふ。人おのおの其の隣に又その兄弟に教へて、汝エホバを識れと復いはじ、そは少より大に至るまでも悉く我を知るべければなりとエホバいひ給ふ。そは我彼

らの不義を赦しその罪をまた思はざるべければ。

(三一・三一以下)

民は契約を破りて神に罪を犯し遂に亡國の詛を其の身に受けた。神の正義の嚴さは彼等の倒れしことに由つて明かである(ロマ書一・二三参照)。然かも神の仁慈は深甚である。そして其の仁慈は神の正義に反してあるのではない。神は自らアブラハムに約束し給ふた其の約束を諭え給はない。一度選びて民とし給ふたものを決して棄て去り給はない。これ神の義である。『視よイスラエルの家に新らしき契約を立つる日來たらん……。我は彼らの神となり、彼等は我民となるべし』と云ひ給ふ。イスラエルの民が己の力を以てして如何にするも神の民たる義務を果し得ない事が明白となつた時神が『彼らの不義を赦し其の罪をまた思はず』、更らに彼らに新らしき心を與へ最早『人おのく其の隣こそその兄弟に教えて汝エホバを知れと復云

はじ、そは少より大に至るまで悉く』神を知り得るやうにならしめ給ふこの事である。

然し乍ら人が犯した罪を無視し之を赦すことは神の正義が許容しない。さらば此の新約は如何にして可能であるか。正義なる神が正義に由つてその民の罪を赦し給ふ道は如何、如何にして彼等は再び神の民たり得、人々皆眞の神を知り、心からその律法を喜ぶ者となり得るであらうか。エレミヤは之について何の語るどころはない。然し乍ら彼の生涯が彼の預言よりも雄辯に此の事を我等に暗示する。こゝに彼の生涯の重大なる意義があるのである。それは『正しきもの正しからぬ者に代りて』(ペテロ前書三・一八) 苦しむことによつてである。

### 悲痛失敗の生涯

ユダ國滅び民の選良は悉くバビロンに移され、國に遣つた者は民のうち屑物のみであつた。エ

レミヤは彼等を助けるため潔きよく國に留まり、彼等のうちから神の榮光の揚ることを待ち望んだのである。然るに其の期待は空しく裏切られた。

彼と共に銳意祖國の回復に勤めたゲダリアは血迷へる同胞の一派のために暗殺され、遣された民はバビロンの復讐を恐れて無理にエレミヤを伴ふてエジプトに逃亡した。彼等はこゝまで逃れ出れば最早バビロンの勢力は及ぶまいと思ひ誤つた。

それのみではない。彼等は國が滅んでかくまで民が悲惨な運命に陥つたのをエホバに背いた罪の結果と思はず、其の昔マナセ王の時國榮えたのはアツシリヤの神天后を崇拜したためであり、其の後ヨシア王が大改革を行ひ此の崇拜を廢したためその罰として亡國が來たのだと思ひ、エジプトに於て再び此の偶像崇拜を開始した。然かもバビロンの手はやがて彼等の上に延び來て遂に彼等は跡方なくなつて仕舞つた。



ああ、之が全地に神を顯はすため選ばれたイスラエルの國と民との末路であつた。其の民の遺れる者がかやうに故國を棄てその神を棄て滅び去つたのである。エレミヤが四十年の永い間彼等をしてエホバに歸へらしめやうとして苦しみに苦しみを加へたその一生の仕事は悉く失敗に歸した。傳説によれば彼はエジプトに於て同胞のため石にて打ち殺されたそうである。イスラエルの國と宗教の最美なる者はかくして國と共に滅び失せた。神に對して最も忠實なりし者の最後はかくも悲惨であつた。然り、彼の一生はこれその民の罪のための呪詛を一身に荷つた生涯であつた。そしてその民、その國、その宗教と一緒に斃れたのである。

### エレミヤの生涯の意義

エレミヤの出づる前多くの眞の預言者が出でイスラエルの民の罪を責め神の刑罰として亡國の必

す來ることを預言し、エレミヤも亦同じくこれを預言した。然し乍らエレミヤがその先進預言者たちと違つたところは彼自身その亡國に際し亡國の悲痛の酒杯をその最後の殘滓まで満喫した事にある。先に出た預言者たちは神の正義を唱へ、不義は必ず罰せらるゝの眞理を語つた。然るにエレミヤは其の眞理を不義ならざる自分の一身に具體化して之を表現した。彼の生涯は神の眞理其の者であつた。そして國と民と神殿とあらゆる禮拜の諸制度が悉く滅び失せた時、イスラエルの宗教の眞髓たる神と民との眞の關係は彼只一人の心に殘存した。今まで宗教は主として國民的であり外形的宗教であつたのが、今や彼の胸のうちにて個人的靈的なる宗教に轉化し、靈と眞とを以て拜する眞宗教は悲惨なるエレミヤの一生涯の敬虔を通じて後世に傳つたのである。彼なくして詩篇は作られなかつたであらうとウエルハウゼンは云ふ。律法

によらず、神殿によらず。國民的關係によらず、人は人として各自神と交はり得る道はエレミヤの生涯の經驗によつて開かれたのである。

嘗にそればかりではない。悲惨極まりなき彼の生涯はそも何のためであつたか、彼は己が國と同胞とを心の奥底から愛した。然かも彼は亡國の悲痛と同胞からの迫害を一身に受けた。彼は又當時に於て神に最も親しく最も神と義しき關係に在つた。然かも神が國民の罪を罰し給ふやその呪詛の重荷は悉く彼の上に落ちて來た。かくまで神と義しくかくまで同胞を愛する彼が最も激げしく神と同胞から虐遇されたのである。此の苦惱に彼を追しやり給ふた者は神であつた。之れから彼を救ひ出し給ふ者も亦神より外はなかつた。然かも神は彼が國民の罪のために苦しむことをよしとし給ひ、敢て之を救はうとし給はなかつた。此の事はエレミヤ自身を昏迷せしめた。何故神の正義は神の義

人をかくまで苦しめるか、神の正義は嚴然として世を支配する、然かも義人が苦しみ惡人の榮ゆるのは何故か。エレミヤは神と人に關する此の大問題を自ら解き得たか或は解き得ずして死んだか私は知らない。只然し、彼の生涯其の者が此の大問題を世に提供し、又その解決の光明を與へたのである。こゝにエレミヤの生涯の最大の意義がある。

國滅びバビロンに捕え移されたイスラエルの民は今や偶像の民に使役せられ細さに屈辱を受け乍ら、眞心からエホバを慕ひ之を拜し得たのは、實に彼等がエレミヤの生涯とその預言した神の言を思ひ出したからであつた。そしてエホバに信頼をつゞけ得て遂に再び故國に歸へつて國を建てることを得たのである。神は預言者の預言通り此のこゝを成し給ふた。之れ歴史上實に不可思議な出來事であつた。彼等は此の事によつて始めて宗教上の大眞理を知つた。それは何か、眞に神に義し

き義人が同胞に代つて苦しむことによつて人々は救はれると云ふことである。イスラエルの國は預言者エレミヤの生涯によつて救はれたのである。

一 我らが聞けることに誰か信をおきし、

エホバの御腕は誰にか示されし。

そは彼は我等の前に芽生えの如く、

乾燥きたる地に生うる根の如く育ちぬ。

我らの慕ふ形姿なく美しさなく、

我らが渴仰する威容なし。

三 侮られて人に棄てられ、

悲痛の人にして病患になつむ。

顔を覆うて我らが避くる者の如く、

侮られて我らは尊まざりき。

四 されど彼の負へるは正しく我らの病患、

我らの悲痛を取りて己が重荷となしぬ。

さるを我らは思へらく彼はせめられ、

神に打たれて業病に悩むと。

五 されど彼の刺されし罪は我らの罪、

彼の碎かれし不義は我らの不義、

我らの安きために彼懲罰しめられ、

彼の打傷によりて我ら癒さる。

六 我らは皆羊の如く迷ひて、

各々思ひ思ひの道を彷彿ひぬ。

さるをエホバは彼の上に、

我ら凡ての不義を置き給ひぬ。(イザヤ書五三)

六百年の後我らの不義をば悉く己が身に負うて、

我等を神に義とせんために悲痛の道をカルバリの

丘に上り給ひし我等の救主イエスの御姿を最も良

く反映した者はエレミヤであつた。彼こそは眞に

『主の道を備へ、その路すぢを直く』する先驅者

であつた。イザヤ書五十三章の『悩める僕』は彼

なくしては多分書かれなかつたであらう。



## 一一 エレミヤの聖召（上）

## アナトテの村

エルサレムの東北約一里半程のところに今も尚昔の名を留めてアナタと稱ばれる一村落がある。無花果の樹蔭に覆はれて一かたまりとなつて居る農家の一聚落である。村は諸峯の頂を足許に見下ろすシオンの山から幾段かの階段をなしてエリコを経て東方ヨルダンの谿谷まで降りゆく土地の最初の段階に在る。エルサレムからは丘に遮へぎられて見えないが、オリブ山からは遙かに之を眺望することが出来るようである。此の村はエルサレムからガリラヤに通ずる大路よりも、又エリコを経てヨルダンにゆく道よりも離れて邊鄙なる場所に在るが、今も尚之を訪ふ人が甚だ多い。それは凡て二千五百四十餘年前ユダの最大の預言者と云はれるエレミヤの故郷であるからである。

アナトテの村はかやうに首府エルサレムを背にして東方ヨルダンの谿谷に相對し、北方は足下に展開する曠野を隔て、遙かにエフライムの山々に相面して居る。ヨルダン河は森と丘との下に隠れて見えないが、川の彼方にギレアデの連峯が高く聳えて居るのがよく見える。太陽はいつも此の山頂から上り來り前方の曠野を照すのである。

此の曠野は一面の砂丘であつて、空氣は著しく乾燥して居て、太陽が冲天に照る頃は災天に照されて砂はギラギラと輝き、萬物は燃ゆるかの如くなる。土地は耕作に適しないのみか何處にも憩ふべき樹蔭とてはなく、汲むべき清泉はない。只裸山のみ累々として重疊し、熱砂を吹き卷くる風に暴され、神の正義の激しき御怒に罪は悉く焼き盡される地獄の爐もかくやと思はれるのである。满目荒涼且つ凄愴饑狼の群はそこを徘徊し、遠くヨルダンの叢からは獅子の吼ゆる聲が聞える。エ

レミヤが幼時から毎日見なれた景色は之であつた。

熱き風、曠野なる秃山ハゲ山より、

我が民の上に眞面まことにぞ吹く (四・一一)。

林より獅子は襲ひ、

荒野の狼彼らを食はん。

豹は村々をめぐり、

そこを旅立つ者を裂く (五・六)。

此の曠野こそはバプテスマのヨハネが駱駝の皮衣を着、野蜜と蝗を食うて住みなれたところ、又此のヨハネからバプテスマを受けて後四十日四十夜主イエスが誘惑を受けて彷徨ひ給うたところである。此の附近はイスラエルの民の最初の王ソウルを出したベニヤミンの地であり、今まで度々大虐殺の行はれたところであつた。そこには又イスラエルの十二の兄弟の母ラケルの墓があつた。

ヨセフが居らすなつた事を聞いて父のヤコブ(イスラエル)がいたく之を哀しみ泣いたやうに。その妻ラケルの亡霊はエレミヤの生れる七十餘年前即ち七百二十一年、アツシリヤ王サルゴンがマサリヤを陥れて北方のイスラエル國を滅ぼし、ラケルの裔なるイスラエルの十二族のうち十族がアツシリヤに捕え移されて以來、毎日毎夜居らすなつた子らを嘆き泣しむ悲痛凄慘の聲が數十年來響き亘つて居るのである。

聲ラマに聞こゆ、慟哭の聲、

且ついとさしき號泣なげきなり。

ラケル子らのために嘆けども、

慰めを得られじ、

そは彼ら居らずなりせば (三一・一五)。

曠野の前方に聳ゆるエフライムの山々の彼方に在るシロは嘗て神の契約の櫃の守護者エリこそその

子孫が永く祭司として神に仕へたところであつた。そこに在つた由緒ある神殿は今やイスラエルの國が滅亡してそれと共に廢墟になつて仕舞つた。多感なるエレミヤは幼時から此等の事を見聞してイスラエルの民の悲惨なる歴史について考へざるを得なかつたであらう。何故に神の民はかくまで悲惨なる境遇に陥りしか。その將來は最早絶望にして彼らは再び歸へり來ることはあらざるか。幼き時よりエレミヤは之を沈思したに相違ない。

彼はアナトテの祭司の家に生れ、その家は宗教殊に神殿と大なる關係があつた。殊に彼の家柄は多分契約の櫃の守護者エリから出で、ソロモン王の即位の時左遷されてアナトテに移り住んだアビヤタルを祖先とした名門であつたらしい。されば彼は生れ出ぬ前よりイスラエルの宗教については多くの事を學ばせられるべく運命つけられて居たのである。然かも彼は後年その兄弟、その家の人

人から迫害され生命を奪はれやうとし事たより推せば、その家の傳統以上に深い宗教的感受性をもつて居た事は疑もない。彼が預言者とせられたのは、彼よりも遙かに門地が高くあつたと思はるゝ、イザヤと同じく、その血統門閥の故ではなかつた。テコアの農夫アモスと同様彼は田園に於て神の御聲に接したのである。

彼は實に生れ乍らの天然詩人であつた。自然に對して温い同情を有し、ワーズワースの如く天然の心を洞察し、そのうちに神の御姿を見た。レバノン山上に積る千古の雪が溶けて流れて永久にヨルダン川の源となつて涸れる事のないのを見て、彼はイスラエルの國民的存在の基礎であるその宗教の永久性と其の因つて來る本源であるエホバを思つた。

レバノンの雪孰んぞ、

山の巖より消去らん。



丘より湧き出づ泉何とて、

水の流、涸れ果てん (一八・一四)。

静寂無言の自然は雄辯にイスラエルの民の神なるエホバを語る。春秋二期少しの時をも違えず飛來する鳥の本能に神の動かすべからざる法則がある。然かも神の民はエホバを忘れ、神の前に義しくあるべき習慣を失ひ、神に歸へり來るべき本能を喪失して居るのを見た。

大空の鶴さへも、

その定めきまの期きを知り。

班鳩トビと燕ツバメとは、

その來るべき時期を知る。

されど我が民は知らず、

エホバの御前まへの風習かざしを (八・七)。

かく彼は天然に同情し其の心を探ね求めてそこに神に接した。それは彼が生れ乍ら凡ての物に對

して深い同情があつたからである。彼は人に對しては更に深いやさしい愛情を有して居た。この心は彼をして特にイスラエルの國の預言者ホセヤに同感せしめた。エレミヤは實に彼と心情を同じくするのみでなく、その境遇にも相似たところがあつた。ホセヤはエレミヤと同じく祭司の家に生れたらしく、然かもエレミヤと同じく祭司の職とその司る儀式とを嫌惡し、之に何の價値をも認めなかつた。彼はエレミヤと同様己が同胞に深い同情を有し乍ら。その民の罪を責め、その上に降る神の怒、來るべき亡國を預言した。ホセヤの感化は他の何人よりも強く、殊にエレミヤの最初期の預言に於て最も顯著に之を見る。

### ユダの政治及び宗教

紀元前六百二十六年、北方の大帝國アッシリヤの最後の大王アシユールバニバルが死して世界

史上の大危機が生じた。大帝國崩壞の機運は熟し、從來其の下に威服隸屬して居た諸民族の間の均勢は破れ、各自獨立を計つて動搖が生じて來たのである。常にアツシリヤの脅威を受けたユダはヘゼキヤ王の時は幸其の大軍を撃退し得たが其の子マナセ王以來遂にアツシリヤに隸屬するに至つた。然るに今やユダは近年にない平和を得た。王にはエレミヤと殆ど同年輩の敬虔なるヨシアが位に在つて、銳意國務を司りつゝあつた。

(かれは) 公平と公義と行ひ、  
貧者窮者の訴を聴けり。

是眞に我を知る道ならずや、

エホバの御言 (二二・一五及一六)。

外よりは侵略の脅威失せ、内には宗教に政治に改革の熱心あり、社會政策は行はれ國民主義の運動は起りつゝあつた。當に國運の復興隆昌の徴が

あつた。人々は大なる希望を國の將來に認めた。

然るに『エホバ宣のたまはく、わが思はなんぢらの思とことなり、わが道はなんぢらの道と異なる。天の地より高きが如く、わが道はなんぢらの道より高く、わが思は汝らの思より高し』イザヤ五五・八である。神の眼よりせばユダの國運はヘゼキヤ王と預言者イザヤの死と共に既に定まつたのである。

ヘゼキヤ王の死後(六百八十六年)其の子マナセ即位して以來、國はアツシリヤ軍に蹂躪されて疲弊し、王はアツシリヤに隸屬して滅亡を免れたがアツシリヤに支拂ふ重課のために益々國は衰へた。アツシリヤは支配下の諸國の内政には干涉することなかつたが、之が隸屬の證として必らずアツシリヤの最高の神を祀らしめた。之を以てマナセ王はエホバの神殿の側に祭壇を設け之を拜する事を餘儀なしせしめられたのである。之に背く事はアツシリヤに背く事である。アツシリヤに背く

事は國を滅ぼす事であつた。王は政治上の必要よりして之に屈した。

然るに國を滅ぼさざらんとして此の政治的手段採用の代價はユダ國の基、國民的生命の源泉である宗教の頽廢であつた。イスラエルの民の神エホバは萬民を支配し給ふ唯一の神であり、イスラエルの民はその選民として只エホバに服従する事によつて他の神々及之を祀る國々に服従せず、その國の獨立とその民の自由を享受し得るのである。されば國民的宗教の純正維持を任務とする預言者たちは王の背信を默過する事は出来ない。彼らは盛に王を攻撃したのである。爰に於て王は彼らを壓迫し、其の所論は當面の政治外交上の大問題に觸れたため彼らを捕へて續々之を死刑に處した。

ユダは實にジレムマのうちに在つた。國の滅亡回避のためアツシリヤに屈しその神を祀つた事は己が國の基たる宗教を墮落せしめ、國民的生命の

源泉から離れ、遂に挽回し難き亡國の因となつたのである。國民は王の政策によつて一時の苟安を貪り得た。アツシリヤとの修交はその文化の輸入を容易ならしめ、人々はアツシリヤの服裝を模倣してそのモダンを誇つた(セバニヤ書二・八)。彼らは活ける泉の源なるエホバを棄て、己れ自ら水溜を掘つた。然かもその水溜はひゞわられて水を保ら得ぬため、大河の水を得んとてアツシリヤ路にさまようたのである(エレミヤ記二・二三)。

マナセ王が預言者と反目した宗教上而して政治上の大問題は今一つあつた。それはアツシリヤに由つて滅ぼされた北方イスラエルの國の殘民に係した。七百二十一年サルゴン王のためサマリヤを陥れられ、數萬の民はアツシリヤに捕え移され、其の跡には異邦人入り來り、イスラエルの國は滅びたが、大多數の國民は尙その地に殘存した。されど人口稀薄となつて野獸諸所に徘徊し、又疫病



に惱まされる事多く、後から入り來つた者は之を以て土地の神を拜しないためその怒に觸れたものとし、アツシリヤに嘆願し舊宗教を復興し、流囚中よりエホバを祀る祭司の派遣を乞ふた。こゝに於てエホバはアツシヤの神と混交して拜せられるやうになつたのである。之を見てユダの預言者たちは自國に於けると同様イスラエルの殘留民の間からもアツシリヤの神を排除し、エルサレムの神殿に於て兩國の民一つとなつてエホバを拜する事によつてソロモン王以來分裂した兩者の合同を促進し、之によつて國の獨立を企てダビデの盛時に回復しやうと謀つたのである。

然るにマナセ王は朝鮮又は滿州に對する現代我國の政治家の典型であつた、彼はイスラエルの民の存在の基礎である宗教よりも當面の政治的手段を重要視し、アツシリヤに隸屬して産業的繁榮を計り乍ら次第に政治的手段を以てサマリヤを支配

し以て此の地をユダに合併しやうと企てた。飽くまで政治家であつた王は之がためアツシリヤの神を拜する事を敢てし國民をしてその永遠的生命の源から離れしめ、兩者合同どころか、ユダも亦イスラエルの後を追うて、救ふべからざる亡國の因を作つたのである。

マナセが人々を誘ひて惡をなせしことはエホバがイスラエルの子孫の前に滅ぼし給ひし國々の人よりも甚だしかりき。是に於て……イスラエルの神エホバかく言ひ給ふ。視よ、我エルサレムとユダに災害をくだす。是を聞く者はその耳ふたつ乍ら鳴らん……我わが産業の民の殘餘を棄てこれをその敵の手に付さん。彼等はその諸の敵の擄掠にあひ、掠奪にあふべし（列王紀略下二二）。

此のマナセ王の背教的政治あつて以來ユダの國民的墮落は病既に膏肓に入つた。英王の熱心も之を挽回する事は不可能となつたのである。

ユダを脅威したアツシリヤは今や崩壞に瀕し、

ユダは外よりの侵略の危惧を免れ、内は平和繁榮の曙光生じた時、今まで諸國民の間に聞きなれない一群の野人が北方を荒し回まるごの風聲が聞えて來た。それはスクタイ人と稱ばれた蠻民の一團であつた。

其の半世紀以前彼らはカウカサス地方に出沒して居たが次第に南方に移動し來り、アツシリヤと同盟して、その首都ニネベを包圍して居るメヂヤ軍の背後を襲ひ之に退却を餘儀なくせしめた。其の後地中海沿岸通ひに南下してエジプトの國境まで肉薄したが、エジプトの賄賂を得てか或は抵抗に會つてか北方に引き退いた。彼等は皆弓を携へ馬に騎り、常に鞍上で生活し、衣服其の他の生活品は背後から車で運んで居た。慄悍無比、至るところの國々を掠奪し大に恐れられた。北方の大帝國の崩壞に瀕し、諸民族間の均衝破れ、大動搖が生じ初めた際、新に此の蠻民が北からの禍となり、

ユダの不安の因となつた。全人類の主に在し、全世界の歴史を創造し給ふ神は何をか爲さんとし給ふのであるか。誰か此の時の徵しるしを解く者があるか。『預言者は歴史の中から生じ、歴史に併行して進み、歴史を解釋する』と云ふ。

夫エホバはその隠れたる事をその僕なる預言者に傳へずしては何事も爲し給はざるなり（アモス三・七）。

神は目覺め、世界の鍋は沸騰しつゝあり、只神のみその意味と目的を知り給ふ。之を解して民に告げるため百年前アモス、ホゼヤ、ミカ、イザヤが預言者として召された。今や七十餘年の神の御言の沈黙の後再び預言者は輩出した。ゼバニア、ナホム、ハバクク、而してエレミヤ、——エレミヤが神に召されて預言者となつたのはかやうな時であつた。

## 輓近考古學と舊約聖書 (四)

アブラハム時代

小 栗 襄 三

## 三、スメル律と其社會

ウル第三王朝時代の社會は三階級に分割さる。

上流階級(Amelu)、市民階級(Mushkinu)、奴隸階級(Ardn)にして、上流階級は治權者、祭司、正規軍人より成り、市民階級は商人、教師、農民、勞働者、技術者等自由民より成り、奴隸階級は捕虜、賣買等による非自由民より成る。前二階級に於けるスメル律の適用は大體に於て同じ標準に基くも奴隸階級に於ては自由を認められず私有財産と同一視せらる。

而て舊約聖書記者に據るアブラハムの二重結婚をスメル律に照す時に彼の市民階級に屬する者なるは疑ひない。彼の妻サライはウルの人であつた。

(創十一・三一) 彼等は結婚後ウルを出發し放浪し約東の地カナンに住みしより十年も經たるも子供なく、家督はダマスコのエリエゼルによつて相續されるようになった。アブラハムは彼に相續さるゝを厭ひエホバに子を與へらるゝ様に願つた。

エホバは彼に嗣子を與える事を約束した。又妻サライは石女なりしによりて自分の婢ハガル(エジプトの女にして多分エジプト王より贈られしものならん。創十二・十六)を夫に與えた。アブラハムが彼女より獲し子はイシマエルであつた。然るに其後十四年にしてエホバの約束は履行されサライはイサクを産み家督は嗣子イサクによつて相續されたのである(創十二章以下參照)。事實は至つて簡單であるが、此れをスメル律に照す時にアブラハムの家庭問題に對する態度を視ふ事が出来る。スメル律による婚姻は結婚後起り得る種々なる問題を雙方にて合議の上―多くは離婚の場合に於



ける財産に關するも、或ものは夫が借財に苦しむ場合妻が三年間奴隷として賣らるゝを是認せるものあり、又結婚後或期間内に子供を得ざる場合後妻を夫は迎える事が出来る。斯る場合を豫想して『後妻は正妻の足を洗ひ、又寺院に正妻の椅子を運ぶ義務あり』など、規約せしものもある。―規約を作り、此れを坭土文書に記し印璽を捺して婚姻證(Marriage lines)となして結婚したのである。

アブラハムとサライの結婚はウルでなされた。従つてスメル律に由り此の婚姻證を作つたであらうと思はれる。してハニ、ニサバ律及びカムラビ法典より推察するならば彼に嗣子なき場合婚姻證の規約如何に關らず彼は後妻を娶り嗣子を獲る權利はあつた。乍併ら彼は律法を楯に彼の權利を行はんとせせず、先づエホバに解決を求めた。してエホバは彼に嗣子を與ふべく約束されたのである。(創十五・四)妻サライも亦己が石女なるにより、

夫に對する義務として後妻を夫の爲めに選ぶか、又は夫の選ぶ女を家に入るゝを許さなければならぬ立場にあつた(參照カムラビ法第四百四十四條及第四百四十六條)。して彼女はエジプト女の下婢ハガルをアブラハムに與へたのである。此の場合もし夫が彼の女を選んだならば、彼女の權利を奪はるゝにより、自己の下婢を夫に與へる事は正妻としての權利を保持する上に得策であること考へたかも知れない(參考カムラビ法第七十一條)。

斯く解釋する方が順當であるとも考へられる、併し事件はカナンで起つたものでアブラハムが違約したとしても起訴するマシキムがあるわけではないが、彼等は結婚當時のスメル律を重んじた事は論を待つまい。又スメル律が當時の習慣法の延長なるが故にでもある。

ハガルが産んだ子はイシマエルであつた。従つてアブラハムの財産は當然その子に相續せらるゝ

事となつたのである。斯くなるやハガルとサライの地位が轉倒して來た事は争へない。其後イサクが與へらるゝ迄十四年間の夫婦の心情に多くの危機を孕んだ、ハガル脱走等の事件はアブラハムをして如何に惱ました事であらうか、彼には妻サライを下婢としハガルを正妻にする事も出來たであらう彼はスメル律を楯に家庭問題を裁斷しようとするれば容易に出來たであらう。乍併彼は此の世の律法によつて萬事の解決を望まなかつた。最後迄エホバの約束を信じてヨリよき解決を待つたのである。彼は隠忍して十有餘年の月日を過した。遂に此の問題の解決する日は來た。石女のサライはイサクを産み嗣子を獲たのであつた。斯くして彼は豫期以上の解決を與へられたのであつた。彼はイシマエルにより萬民の父となり。イサクによつて信仰の父となつたのである (cf. K. D. Macmillan: *Marriage among the Early Babylonians and Hebrews.*

P. T. R. 1908)。

さて當時の教育制度は如何であつたらうか。スメルの教育は中世紀の歐洲に於ける修道院の如くに寺院がその中心機關であつた。兒童は寺院にて僧侶より楔狀文字の読み書きを學ぶのである。先づその綴音ホネテイクを暗記し、アイウエオ順に揃べる。(此點假名に類似點多し)、次にその表意音イセイオグラムを學ぶ。(邦字の假名と漢字を使用ると同様なり) 一通りの綴音と表意音を學んだ後に彼等はイルー (ilu) の項目に於て神名即ちエンキ (Enki) エンリル (Enlil) ナブー (Nabu) シヤマシ (Shamash) イシタール (Ishtar or Innini) ニンクルサツク (Nin-Khursag) 等の讀方及びマトウ (Matu) の項目の下に地名を憶ゆるのである (cf. F. Delitzsch: *Assyrische Lesestücke*)。然る後ち短文より初め漸次碑文書に進む傍ら文法を學ぶのである。(出土文書中に名詞

動詞の變格表多數あり。其後は各自の専門に入り  
 數學、建築、天文、法律、醫學、地理、美術等を  
 專攻するのである。

建築に關して、Lagash の Gudea (D) の像の碑文參考。

Leon Heuzey: Antiquites Chaldeennes P. 47, P. 171 ;

地理に關して、Akkad の王 Sargon の地圖參照。

文典及歴史、A. Poebel: Grammatical and Historical Text

from Nippur.

數學に關して、H. V. Hilpecht: Mathematical, Meteorological,

and Chronological Texts from Temple Library.

法律及行政に關して、E. Chiera: Legal and Administrative Documents, etc.

當時の醫學界は極幼稚なものであつた。外科に  
 藥草を主とし、又魔術も行ふのである。當時に於  
 ける唯一の科學者として僧侶と同一視せられし彼  
 等もカムラビ法典によれば「醫師にして披針を用  
 ひて眼を治療せし場合、もし患者を失明せしめし  
 ならば醫師の眼は披針にて引抜かる可し」とあり。  
 又腕の治療法を誤りて死に至らしめし場合醫師の  
 腕は切取らるゝのである。所謂復讐的懲戒法 (Lex  
 talionis) が其基本をなしてをり。外科手術よりも

呪術が一般に行はれしは當然であらう。

猶當時の各都市は各々其保護神を祭り、偶像禮  
 拜そのものが社會生活を支配してゐたのもある。

バビロンにマルドウク神あり、ラルサにシヤマシ  
 神あり、ウルにナナル神あり、ニブーアにエン  
 リル神あり、エレツクにイニンニ神があつた。特  
 にウルは文化の中心地であつて、國勢は東は波斯  
 より西は地中海に及びウル發行の約束手形は各都  
 市に通用した程である。此のウルの城内の中心は  
 ナナル月神によつて支配せられてゐたのであつ  
 た。此れがアブラハムの捨去りし故國であつたの  
 である。彼は唯エホバに命せらるゝまゝに、此の  
 ウルを旅立つたのである。斯る文化社會を敵履を  
 棄つるが如くに唯約束を信じてハランよりカナン、  
 カナンより埃及へと放浪したのである。然らば彼  
 の信仰とは何であらうか、舊約は如何に視、又回  
 教徒は彼の信仰を如何にみるであらうか。



## 十字架の福音

石 川 仲 伊

○神は昨日も今日も永遠より永遠に至るまで變り給ふ事なき愛にて在し給ふ。故にその廣大無邊なる恩恵は測りつくす事が出来ない。されど神は同時に義にて在し給ふ。彼の前には少しの不義も赦されず、罰すべきは必ず罰せずしては止み給はない。多くの人は云ふ、神は愛なるが故に怒らない。乍併如何に愛を高調しても罪惡不義を悲しめない。若し不義を許す神ありとせばそれは眞の神ではない。眞の神は義にて在し給ふが故に聖憤の火を以て焼き盡さんと爲し給ふ。

○預言者イザヤは五十二章十三節以下五十三章に於て、明白にキリストの受難と復活とを預言して『此の王は全世界のありとあらゆる王等の上に位

すべきである』と語りて榮光を讚美し、又同時に

『萬民の中に賤しめられ恥かしめられ鞭うたれ苦められて人々は眼に觸れるをさへ厭ふ』と謙遜の狀態を寫し出して居る。次の一句は實に預言中の預言であり、舊約聖書の中心であらう。

彼は我等の愆のために傷けられ、我等の不義の爲に碎かれ、自ら懲罰をうけて我等に平安を與ふ。その打たれし傷によりて我等は癒されたり(五三・五)。

○げに基督の苦難こそは言語に絶して居る、彼のまましひはうなだれてまさに悶死せんばかりの悲哀に滿された。彼はゲッセマネの園に於て祈つた。『わが心いたく憂ひて死ぬるばかりなり』とこそして『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意のまゝにこにはあらず聖意のまゝに爲したまへ』(マタイ二六・三九)と。而して十字架上より苦悶のあまりダビデの一句をかりて『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタンイ』

と絶叫し肉は裂かれ血を流れ息絶え給うた。

○然らば何故に基督は斯くも苦しみ給はねばならなかつたのであるか、彼も亦大義名分の爲に殉教者の如く十字架上に死したのであるか、單なる人間の死に過ぎず、何人も彼の如く死ぬる事が出来るのであるか。否、斷じて然らず、キリストの死は殉教者の死ではなかつた。又何人といへども彼の如く死する事は出来ない。神の貌にて在し給ひしキリストが己を空しうして僕の貌を取り、死に至るまで十字架の死に至るまで從ひ給ひしは實に人類の罪を贖ふ爲の贖罪死であつた。キリストは言ひ給ふた、『斯の如く人の子の來れるも事へらるる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の拯贖として己が生命を與へん爲なり』(マタイ二〇・二八)と、又言ひ給ふた『これは契約のわが血なり、多くの人の爲に罪の赦を得させんとて流す所のものなり』と。彼の死こそ萬民の罪を贖

はんために神の永遠の聖意の中に定められてゐたのである。使徒パウロは言ふ、『我等のなほ弱かりし時、キリスト定りたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給へり』(ロマ五・六)と。

○人は例外なしに皆罪人である。『義人なし一人だになし』である。神に對する不從順は夫自身罪の本源であり、之より無數の罪惡生じ、神との義しき關係破れ、如何なる努力を拂ふも完全に罪なき状態に達する事が出来ない。誠に罪の價は死である。罪が罪として正當に處分せられざる限り人は神に歸りゆく事が出来ない。神若し罪を見通さんか自ら義たるを得ないのである。然かも神は又憐憫の神に在し給ひ我等罪人を罰するに忍びず、その生み給へる獨子を十字架上に犠牲にする事によつて見事に罪を處分し給ふた。こゝに於てかキリストの血は流されたのである。彼は人類の罪を贖ふ爲に死なねばならなかつた。そこにあるものは

呪詛である。彼はアザゼルの羊の如く罪を負ひ、神と人より追はれて獨り呪はるゝ運命を擔はねばならなかつた（レビ記十六章）。誠に『彼はわれらの病患ををおひ、我儕のかなしみを擔ひ、われらの愆のために傷けられ、われらの不義の爲に碎かれ給ふた』。然りキリストの流し給ひし血は實に我等罪人が當然受くべき死刑の死であつた。

○之に由つて我等の罪を無條件に赦し給うたのである。パウロは言ふ『然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等の爲に死に給ひしに由りて神は我等に對する愛をあらはし給へり』（ロマ五・八）と。キリストの我等を愛し給ふ愛は此世の通常の愛（*phileo*）ではない。敵に對する愛である、己を憎み十字架に釘けて殺す爲に喜びてその生命を獻げし聖愛（*agape*）であつた。『愛といふは我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛しその子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり』

（ヨハネ一書四・十）。あゝ感謝すべきかな、我等は何の功なくしてキリストの十字架を仰ぎて罪の赦を得、歡喜と平安を與とらるゝのである。

○我らは只信する事によりてのみ救はれるのである。内村先生曰く『福音即ち眞の基督教はキリストと彼が十字架に釘けられし事である、基督信者の全部はキリストと彼の十字架に於てある。彼の禮拜も道徳も凡て茲に完成されたのである、唯キリスト唯十字架である、そして唯之を信する事である』（研究誌三五五號）と。此世の宗教政治科學藝術によつて救われない。げに人を救ふものは人間の智慧にあらずして神の力である、十字架の福音を除きて『他の者によりては救を得ることなし』（行傳四・十二）である。

北海道の邊鄙な農村の一青年に此の信仰の生じたことは大なる感謝である。之が我が國の農村に普及し、生きて働く時我國目下の最大問題の一つである農村の疲弊は救はるのである（主筆）。



## 柏 木 通 信 (第十信)

齋 藤 宗 次 郎

◎柏木の今昔 恩師は其半生を意味深き放浪的生活に送られしが、明治四十年十月懐かしき角筈の丘陵を後にして、柏木蜀江山の里に移られた。此處に地をトせられて間もなき頃、東北の田舎より上京せる余は、一日恩師に従つて角筈の森を下り、青梅街道の中野口に近き所より右折し、蜀江坂を上りて間もなく目的地に達した。南面の芋畑は二三町の彼方に連り、東方は武蔵野の雄を誇る幾株かの巨大なる樺の間に一二の茅屋を匿したる竹林が背後に雑木雑草の叢叢を控へてあつた。東北に隣れる鎧神社の境内は、老樹の森を以て負はれ、樺の並木に沿ふ小徑を以て通ずるのであつた。残る西北の一帯は見上る程の樺松楓栗孟宗竹等によつて縁滴る繁林を造り、防風に氣温調節に禽鳥の棲家に絶好の地域たるを認めた。一眸視野の間には未だ現代風の異様な建物とは一つも無かつた。

程なく今井館は建てられルーテル館は現はれた。無益有害なる新聞紙の閲讀を廢止せられしは此時である。聖書講演會は開かれ、アブラハム、モーセ、ルーテル傳は引續き

研究せられた。時を割いて勿來關を訪はれ又遠く山形縣に入られた。十九歳の愛嬢路得子の永眠は恩師に取つて悲痛極まる出來事であつた。孟子の所謂天の重任を此人に降さんとするや先づ其心志を苦め云々は此峻酷なる體驗であつた。恩師は克く此試練に耐えた。神の絶對愛に服した。遂に聖靈豊かに降つた。勝利の餘生は確認せられた。

爾來選ばれし人の二十年に亘る献身信賴奮闘の跡を觀よ。内には講堂の落成を見、幾多有爲の青年は聖書の眞理を以て信仰を養はれ出て、は神田の中央に基督再臨の高唱を以て全基督教界に警鐘を響かし。宮城前の十字路に立つて羅馬書の研究に中心眞理を明かにせられた。外には誌上の英文を以て世界の人士に懇へ、世界傳道の爲に支那アフリカ等に祈と資金を寄せ、更にインテリヂェンサーを以て大戰後の戦慄萎靡せる歐米人を教へ。地方の教友を思ふては千葉、茨城、栃木、岩手、北海道、信州、静岡、京都、大阪、神戸、明石、岡山等の讀者會に赴きて眞理と愛とを頒たれた。神宮外苑の高塔よりイザヤの預言を説きて廣く市民に覺醒を促され、其間に英米佛の名士書を寄せ來り、瑞西、獨逸、瑞典の大家親しく柏木の集會に來り臨むを迎へらる。ア、寔に多事なるかな。心血を絞れるガリラヤの道十字架

の道なるキリスト傳は完結を告げ、高齡七十に入つて詩篇の眞意を示し、再び創世記の大精神を明かにせられた。活けるキリストの基督教を宣べ傳へ、哲學、歴史、科學に對する調和を明示された。日は竭きたり。天職は果されたり。

正に春三月の暮、春雨霏々、病褥に日本國の將來を祝し、福音の勝利を讚し、宇宙の完成を謳ふて天父の御許に還り去られた。此の柏木の里は今や恩師の書齋に相對して下宿屋の窓が怪しき口を並べ、數多き自動車が右往左往し、戸外近くに選舉の爭奪戦は行はれ、製薬工場の高き煙突は間斷なく惡臭の煙を吐き飛ばすに至つた。

◎日曜日の集會 八月第二日曜日は在京中の少數の教友が集つた。馬太十五章廿一節以下のカナンの婦人の記事によつて、余は不肖ながら其精神を明かにするの任に當つた。數名の祈は天眞の流露であつた。

◎盲人秋元兄の富士登山 舊新約聖書全部を盲人用の點字に編みたる彼は、七月下旬京都に於ける盲人講習會、新潟に於ける盲人大會に臨んで備さに盲人の精神状態を聞知否目撃して強く感ずる所があつた。歸途所々に信仰の友を尋ね、終に掌中の杖を富嶽に向け吉田口より登山した。十五時間にして絶巔に達し幾十萬の可憐なる盲人のために心

行くばかりに祈を捧げて後、金明水の邊りに一時間の安眠を執り、僅々五時間の後には早や地平線に達した。

◎淺野氏再び柏木に居住 廿一年前瀬戸内海の某校に奉職せしが潔く教鞭を打ち棄て、上京、恩師の好意によつて預言寺の一室に居ること約一ケ年、それより専ら身を獨立傳道に獻げて内地滿鮮の間を往來し純福音を傳へて今日に至つた教友淺野猶三郎氏は此八月下旬再び預言寺に入ることなつた。今後軒を連ぬる今井館に於て新たに聖書講演會を始め、其第一回を九月第一日曜日の午後二時に開いた。友人の好みを以て應援せられし畔上氏は『基督教と現代』と題して説かれた。會衆六十餘名。

◎地方雜信 一、ミス・ワイドナー 曾て余が『祈りの人』としての恩師』中に述べた該女史に關する面白き事實を關東學院坂田祐氏が報じて來た。八月四日御殿場よりの歸へり偶然一外國婦人と乗合はせた。隣席のT氏は『横濱の關東學院の坂田さんです』と紹介してくれた。『貴方が坂田さん！ 内村先生は……』といつてワツと泣き出し暫く言葉が出なかつた。其態度に僕は大きなショックを受けた。同車の友人も驚いた。暫くたつて僕には是非會ひたいと願つて居たとの事。それは黒崎兄の永遠の生命の五月號に『内



村先生を追憶す』と題して僕が先生の記念會に述べた話の  
 大要がのつてゐるのを讀み、其中に内村先生が私に『ワイ  
 ドナーさんの爲に祈つて下さい』と仰つたとの記事を讀ん  
 で、女史は非常に感激して居たのであつた。今日女史が聖  
 書に堅く立ちて獨立傳道をなし、日本に來てから三十年の  
 間、奮闘を續けて來ることの出來たのは内村先生の御蔭で  
 あることなご感激を以て話した。女史は今何れの外國ミッ  
 ションにも屬せず、岐阜三重兩縣下に十數名の日本人傳  
 道者を用ひて熱心に傳道して居る云々。

二、山形縣北村山郡東郷村なる奥山吉次氏のことは曾て  
 『聖書之研究』日々の生涯欄に於て幾度も掲げられしを記  
 憶する。氏は基督の信仰と農具によつて山奥の村里に力强  
 い生活を送るこゝ何十年、氏の苹果の栽培に其愛情苦心努  
 力の跡は紅熱せる美果の風味の上に充分に認められる。初  
 秋其一箱を恩師邸に贈呈し來つた。氏は自園の産を以て謝  
 恩の實を現はされしこと茲に幾回であらうか。氏は今や二  
 十餘名の信仰青年を友とし、農村を死守せらるゝ決心を示  
 されて居る。

三、九州若松にあつて信仰の戦を繼續し祝福の裡に純福  
 音を守る佐伯民子氏此程上京恩師の墓前に祈つて歸らる。

## 祖父の書翰 (一)

江 原 萬 里

今年八月は私の母方の祖父が死んで滿六十年、偶々祖父  
 の古い書翰を得て甚だ興味深く讀んだ。明治四年八月當時  
 民政部に出仕して居た祖父は其の年廢藩置縣あり、舊藩の  
 動搖を案じて賜暇津山に歸省、其の平靜無事を見て安心し、  
 將に歸京の前夜袂別のために友人の宅を訪ね、夜を更して  
 玄關を立出て十數間先の門まで來かかつた時、前方の黒闇  
 のうちから何者にか短銃で狙撃され、彈丸は胸中に命中し  
 た。氣丈であつた祖父はよろめく足を踏みしめて玄關まで  
 取つて返へし、友人を呼び狙撃された事を告げ、そこにあ  
 つた煙草盆の中味を去り、之を枕にして臥せ、懷中時計を  
 出して脈を驗べて絶望を知り、重要書類をその友人に托し  
 て其の儘そこに絶命した。時に三十八歳。嫌疑者を調べた  
 が不明、誰が殺した者が今以て之を知るに由ない。

私は母から此の話を度々聞かされた。私の中學時代亂暴  
 てなまけ者で成績劣等であつた私がよくも不良少年に墮落  
 せずに成長したについては、祖父の死に負ふところ甚だ多  
 きを思ふのである。今猶私に若し身を捨てて國に盡くさう



とする一片の赤心が存するならば、それは確に祖父の遺産である。

最近手にした祖父の書翰は私には個人的になつかしさを感ずるが、此の古い書翰は他の人に取つても興味がある。それは第一に明治維新前後に盛に活動した所謂勤王の志士の心境の一端が知られ、當時急流のやうに轉變した社會事情に在つて我國の道德が如何に變遷したかを示すからである。第二に此の書翰は我國の最後の敵討と云はれて居る七人の赤穂藩士が、祖父が暗殺された半年前高野山に於て同藩士七人を討つた事件に多少の關連を有し、祖父は此の事件に全く關係がなかつたと云ふ事の有力なる證據書類の一つであるからである。瀬戸内海に面した兵庫縣赤穂町は二つの敵討を以て有名である。第一は誰知らぬ者なき赤穂四十七士のそれであり、他の一は爰に述べたものがそれである。祖父の書翰を解するには此の敵討の由來を語るにばならない。それには赤穂藩の内政につき知ることを要する。赤穂藩は淺野長矩が吉良義央を殿中で刃傷したため改易となり、三年後舊津山藩主であつた森家の後裔が入つて藩主となつた。小藩微祿、財政は極度に貧窮した。それがたゞめ藩に二黨相生じ互に相せめぎ、黨争は益々財政を窮乏せ

しめ、財政の窮乏は益々黨争を激化せしめた。祖父が少年の頃、御用人村上眞輔が權勢を掌握し之に對立する年寄森續之丞一派は勢力甚だ微弱であつた。祖父の書翰は此の森に宛てたものである。

祖父名は鞍懸寅二郎、赤穂藩の微賤の出であつた。十五歳の時始めて藩主の嗣子忠弘の給仕(茶坊主)となつて江戸藩邸に赴き、側ら當時の碩學鹽谷岩陰(私の一高時代の漢學の師鹽谷時敏先生の祖父)に學んだ。祖父は若年乍ら藩の財政に一塵の意見を有つて居て度々藩嗣忠弘に進言した。遂に藩嗣及び森續之丞等と協議の上、祕密裡に財政窮乏救濟策を定め、それを實行するため祖父は茶坊主を辭職して國に歸へり、更に遊學の名目で賜暇を受ける事になつた。此の時忠弘が祖父に與へた書翰を見ればされ程藩の財政が窮乏して居たかがわかる。

我等愚蒙短才の上幼年にして人情古態も未だ解不申、迎も諸人の上に立候徳は無之候。然るに(カヤウニ)生合候事諸人の不運に候。然る處其方義諫戒致吳候時より親父御病氣の形にて役人共強て政事向聽候様申出候に付不己事諫言に任せ政事に預り候所必至の成行、誠に驚入候。乍憚先此より借財重り今は領地の物一切打込候ても

其利息に不堪位、其上近來水旱多く惡事災難打續き、一昨年是在所の地震に城地破損、昨春は屋敷の土地昨冬は又々屋敷地震にて大破損にて數多の物入、其手宛に仲々不輕、修覆も成兼其儘の處有之、第一家來共の屋宅も不致難義爲致居候。其上家來共の扶持も滯り誠に面目無之事に存候。領内の諸民も困窮致候より此頃殊に世上異國船等に物騒の處文武の手當も成兼 公儀に對し首尾惡敷世上の批判も惡敷由、第一先祖えの大不孝不可有此上候。

此の事心頭に掛り誠に當惑頓と致方無く日夜心を苦め寢食不安に候處其方事年久敷側にて諸用承り萬端氣を付呉れ其の誠忠の程感謝候。然る處此頃必死の様子顔色に顯はれ我甚氣掛り、いつもながら忠告等に苦慮致居候かと存早く承り度推て相尋ね候處果て國家の大事心に掛させ身命を擲出し働吳候存念、精忠の至我身に取候て如何計嬉敷候。顔色の惡敷今更思當り候。

右大事特と相考果して宜敷思召され候はば改て仰付けられ度旨承知候。幾度も思慮致候處六ヶ敷事成共、元來誠忠を以て取計候良謀故天地神明の加護に因り十の八九は調候様にも被存候。最早此上は何年なり共相調候迄暇を遣し候間腹臣の役人共へ内々通達、表向は申被候通遊學と

稱し何卒、先祖のため首尾克く取計吳、偏に願入候。若し相調候得ば是迄の勞苦に翻し家來共諸人の首尾外間も宜敷其外非常の料にも備申候。然ば 父上も嘸や御安心成され先祖えの孝道にも相成可くと考候間何分偏に願入候。

然し何事も天命故事の成否は豫じめ難計候假令此事相調はず候とも必ず短慮に過り致され間敷、猶我後年を見屈願入り候。何分善惡共芽出度面談の程樂居り候(中略)其方には其上萬里の旅亭に沈吟し、人の奴僕に迄も成り艱難辛苦致吳候了簡何の世にか忘れ申すべき。彼を思ひ是を思ひ、落涙袖を濕し候。心中の愁傷如何計か推察給はるべく候。右は改て願申候如此に候。萬縷離別の時を期し候。早々謹白

安政三丙辰年七月

日

時に祖父二十三歳、祖父の進言した財政救濟策が何であつたか此の手紙では充分わかり兼ねるが「萬里の旅亭に沈吟し人の奴僕に迄も成り艱難辛苦致吳候了簡」とあるより察すれば遊學の名をかりて大阪に出て鹽問屋に奉公し、赤福鹽の取引をなさしめ、そこから借款して財政の急を救ふにあつたものらしい。



○私が住友に勤めるやうになつて最初翁の近くの農家の長屋に住まつた事があつたが、翁はどんな住居か見に来られた事もあつた。私が翁を訪れると禿頭の翁は學生氣分になつて度々私に議論をされた。翁には少しも重役さ云ふ尊大ぶるところがなく、常に若々しい氣持を有ち、物事に對し飽まで研究的であり、必らず物事の兩端をたゞいて意見を立てられた。それ故其の意見は公平であつた。翁は何よりも正直であつた。隱微で心の奥底が知れないと云ふ性格程翁に縁遠きものはなかつた。翁は亦度々人にたよらない獨立自治の精神の重要を説かれた。合理主義の翁は宗教については自分は殘念乍ら之を信じ得ないが善い事である事は充分に理解が出来るさ云ひ、或る頃は歸省されて居た翁の令息に度々私の宅を訪問するやう勧められて居た。

○私が住友を辭して東大の助教となつた時私は翁に對しては眞に相すまいと云ふ感をもつた。住友をやめてからも私は翁の厚情を蒙る事多かつた。翁との文通は頻繁ではなかつたがそれを受取る度にいつもなつかしく感じた。數年前我國で銀行の大恐慌が勃發したその一年程前翁は私に書を寄せて現今我國の經濟界の状態は眞に寒心に堪えないものがある。之に對して何か善い考はないかと謙遜して諮問された事があつた(勿論私に翁に教えるやうな意見はなかつた)。又住友の先主逝去されて總理事としての責任が加はつた時、翁は書を寄せられ兎角不行届勝ちて戦々競々無事を願つて居るが後主が嚴然として正義に立ち世道人心を新にせんとせられるのは眞に神惠と思ふと云はれた。

○私は住友を辭してより既に十年になるが今尙時々住友に立ち歸へつて働いて居る夢を見る事がある。私が大學に立ち歸へつてそこで學生を教える夢は殆ど見た事がない。これは常に住友の事業について多大の尊敬を有し殊にそのうちに私の心から尊敬し愛する數人の先輩と友人とがあるからである。若し私が卒業直後湯川翁に面會せず、住友に入らなかつたならば多分私の經濟論は餘程變つて遙かに急進的革命的であつたであらう。聖書の現代經濟觀中の富の増進は私の住友在職中の經驗化であり、そのうちに在る現代産業指導者論の根據は湯川翁其の他住友に於ける私の知人の觀察に基く所が多い。○然し乍ら時勢は急流の如く動いて居る。何人とも昔のまゝに安する事は出来ない。如何にして我國の産業を暗礁に乗上げしめず之を平安繁榮に導き、かくて社會の眞の福祉を増進せしめ得るか、新時代を來らすには如何なる指導精神が要望されるか。私はその事を思ひそれを考へる毎にいつも先づ住友の事業を踏み臺として之に何を植え何を抜くべきかを考へるのである。私は湯川翁を知つて住友に入り數年間小僧として働き種々の見習をした事の有であつた事々思つて感謝する者である。

●日支兩國軍隊が滿州に於て衝突交戦の飛報に心を痛めた。我等基督者は此の世に生くるも此の世の者ではない。其の國籍は天に在る。されば時局の紛糾、兩國民の感情の激昂に際し、飽くまで冷靜、嚴正なる正義の立場から判斷し、且つ弱者には憐憫を示すべきである。決して軍國的感情に馳らるべきでない。基督者として神に對する責任に任すべきであると思ふ。



# 黑崎聖書研究會

講師 黑崎幸吉

場所 大阪市北區中之島、大阪帝大醫科

學友會記念會館

時刻 十月四日より毎日曜日午前十時

會費 一ヶ月 壹圓

演題 當分の間、初學者にも適するやうに聖書を基礎として基督教概論を講ず。

右入會希望者は兵庫縣武庫郡本山村北畑五〇五同會宛入會申込書請求され度しこの事、又當日會場にて申込み得る由なり。京阪神地方の本誌讀者に入會をお勧めする（江原）。

黑崎幸吉新著

## 奴隸の生涯

定價一圓三十錢 送料十錢

本書は著者のキリスト中心の福音的信仰を端的に知り得るに便である。近來十字架中心と稱し信仰の名に由つて律法を説く者も少なくないが著者の純福音的であるところに特色がある。

（名古屋市中區流川町 一粒社發行）

## 江原萬里著 聖書の現代經濟觀

定價一圓二十錢（送料八錢）

此の度第二版發行。初版發行以來著者宛讀後の感想を寄する者甚だ多く、殊に不信者及び求道者の間に多大の反響があつた。本書は「ヤソ臭くないヤソの本」と稱せられた。生きて人の一生涯を指導する信仰のこんなものであるか。かかる信仰が此の地上に如何なる影響を及ぼしつつあり、如何なる結果を持ち來たらしたかを知り度いと思ふ者には、本書は善き參考となるであらう。

内容抄録。故郷歸還、運命か攝理か、ガラヤの春、士族の商法、胃の腑哲學、鈴木馬左也翁、カリソン、基督者とは何か、後篇富の増進。等長短三十篇富の増進は著者が實業界在勤中の經驗を経とし、帝大奉職中の研究を緯とし彩るに著者の信仰を以てした百頁の長論文である。ブルヂョア經濟學でもプロレタリアート經濟學でもない。基督者經濟學である。當に聖書の現代經濟觀である。著者の署名希望者は直接本社へ申込のこと。

## 聖書の眞理定價（送料共）

- 一 部 二十錢
- 半年（六部） 一圓十錢
- 一年（十二部） 二圓十錢
- 海外一年分 二圓六十錢

拂込は振替東京六三三七五番 聖書の眞理社宛のこと

### 思想と生活 合本

- 第一卷 二 圓 送料八錢
- 第二卷 一圓八十錢 送料六錢
- 第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年九月二十七日 印刷納本  
昭和六年十月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四三

編輯印刷 江原萬里

兼發行人 東京市外濠谷町向山九七

發行所 聖書之眞理社

名古屋市中區流川町一八

印刷所 一粒社印刷所

東京市外柏木九四六

發賣所 獨立堂書房

振替東京一九四六八

本誌定價二十錢

（昭和三年二月十六日）

（第三種郵便物認可） 聖書之眞理 第四十八號

（昭和六年十月一日發行）

（毎月一圓一日發行）